

JST 研究開発戦略センター

られている。例えば、エネルギー効率が高く長寿命の蓄電池や、環境負荷の低い製造プロセス、希少資源に依存しない磁石や触媒、新たなリサイクルの方法、再生プラスチックの利用など、わが国でもさまざまな側面から技術開発がなされている。

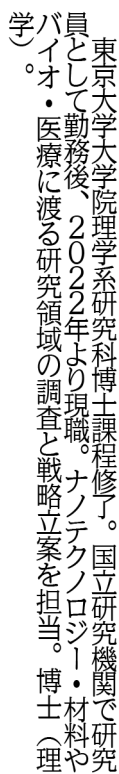
源の再利用の割合や製品寿命などに基づいた循環性指標を提案している。また欧州委員会

棄あるいは回収される置き換えることも多
までの過程は非常に複雑である。使用中にそ
のがある持続可能性の評
価は容易でない。

的可能性の評価が可能となり、各技術の円滑な社会実装に寄与する。さらに、物理化学的な特徴と持続可能性との関係に基づいて、新規の材料やプロセスの設

効率的な研究開発、ひいてはモノづくり産業の競争力強化につながる。

から統一的に評価する。響や社会経済的影響までは、温室効果ガス（G 製品が実世界に出てから指標や手法の検討である。例えば、「持続可 発表した。H G）の排出量などによる物理化学的な状態限定されていたり、算の変化と、生体や環境に出の際に不足する情報に現れる影響との関係性などを明らかにして



研究開発戦略センター作成

材料やプロセスの研究開発と、持続可能性の評価の科学的根拠の模索を両輪で進めていくことが重要である。これにより、新たなモノづくりの姿を形作りながら、持続可能な社会の実現への歩みを加速できようであろう。

無断転載・複写禁止(株)日刊工業新聞社